

<b>Title</b>	知識の諸問題
<b>Author</b>	神野, 慧一郎
<b>Citation</b>	人文研究. 28 卷 6 号, p.388-412.
<b>Issue Date</b>	1976
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# 知識の諸問題

神野 慧一郎

- 0 緒言      1 知覚の要素と構造      2 知識と主観性      3  
 知識の客観性 (I)      4 直接実在論 (常識の知覚論)      5 知  
 覚の因果説 (知覚対象)      6 観念論      7 知覚と知識      8  
 知識の客観性 (II)

## 緒言

0.1 近世の知識論はデカルトに始まる。デカルトの合理論に対立せしめられ、いわゆる実験的方法の祖とされるF・ベーコンはやや混乱した思想の持主であって、全くの経験論者とも、全くの合理論者とも言えぬ。のみならず科学方法論におけるデカルト—ベーコンの対立は、ロイヤルソサエティ、特にニュートンに追従する面々のつくり上げた多分にナショナリズムに起因する神話にすぎない。このことは17世紀後半におけるデカルト主義の急速な拡がり、ニュートンの『原理』におけるデカルトの思想の深い影響と、彼のデカルトに対する強い嫌悪を見るとき、思い半ばに過ぎよう。英国人達はニュートンとデカルトとの思想上の差異を強調しすぎた嫌いがある。

近世の知識論がデカルトに始まるというのは、しかし、彼の思想が近代科学の形成に重要な指針を与えたことのみによるのではない。近世以降、合理論のみならず経験論も、デカルトの設定した問題解決の枠組の中で議論を展開しており、その意味で両者軌を一にしているのである。すなわち、デカルト以来、近世の知識論は、知識の基礎づけは確実にして不可疑なるものからの演繹または構成によってなされうると考え、かかる確実にして不可疑なるものの探究につとめることとなった。たとえばデカルトはこの確実にするものを、神が人間に与えた真理の種子たる内在観念、換言すれば理性の内にもとめた。これに反し古典的 (18世紀の) 経験論者はこれを知識の唯一の源泉たる外界についての知識のうちにもとめた。両者が確実性の探究に向う方向は異っているが、ともに知識の形成のための出発点が大切と考え、知識の正当性を証明するのはその出生を明らかにするにあるとする発生的考察の発想において同巧異曲を奏するものである。デカルトは出発点を本当に確実にたらしめるために方法的懐疑を用いて、明晰判明なるものこそ真に不可疑なりとし

た。経験論の場合は、いささかの迂余曲折を経たが、不可疑なるものを論理的真理および直接経験にもとめることとなったのである。感覚所与や私的経験の議論の開発は主としてこの結果であると言える。

しかしながら経験論の帰結は極めてパラドクシカルな事態を生み出した。确实性の探究は一方において経験論のいう知識を論理的真理を除いては全く主観的なもの（たとえば感覚所与）としてしまったのに、経験論者は正当化された知識すなわち确实性をもって真とされる知識をあい変わらず求めつづけているからである。換言すれば、経験論者が見出した不可疑の真理は、論理的真理を除けば主観的であるのに、彼らが求めつづけているのは客観的知識なのである。もちろんここで経験論者は正当化の基準を弱めて、たとえば常識を基準とすることもできるし、また、帰納的正当化 *inductive justification* のための方式を組み立てるという途にでることもできる。そしてそのとき、何程かまたは何らかの意味で确实でありうるためには証拠による支持 (*evidential support*) の議論が必要となろう。しかし、いかに多くの経験的証拠を集めても真理の絶対的保証は得られないのである。

0.2 さて、われわれはいかなる道をすすむべきか。われわれが眼前にしているのは、経験論の失敗だけではない。合理論も別の困難におち入っているのである。

論理的演繹は前提に含まれているもの以上を結論として取り出すことを許さない。すなわち、仮に出発点に不可疑なる真理をもっていたとしても、そこから出発して論理的方法によって知識の拡大・生長を図ることはできない。デカルトの場合、彼はアリストテレスの論理学を軽蔑し、真理の探究に用うべきは分析という方法であるとした。しかし、彼の分析の観念は多様なことを含んである。数学でいう解析の観念のほか、就中、仮説—演繹的方法や、理論モデルの構築のようなことをも含んでいるのである。それ故に、彼は自らの方法が知識を拡大増加するものと言えたのであった。従ってわれわれは仮にデカルトに従うにしても、彼のいうところの方法に一層の分析を加えて、事態を明らかにする必要がある。従来の合理論と経験論という対比は誤っているのかもしれない。

知識についてのわれわれの議論をまず手近なところ、すなわち、常識のいう知識の分析から始めて見たい。われわれのたどる道は、主観的知識の源泉である感覚的知覚の構造の分析から始まり、客観的知識と主観的知識（信念）との相違を明らかにするに向うであろう。

## 1 知覚の要素と構造

1.1 常識の知識論は感覚的知覚を信頼して、殆んどの場合真なる情報をわれわれに伝えてくれると考えている。常識にとっては、数学や論理の命題を除いて、ほとんどのわれわれの知識は感覚を通じて得られるものである (cf Popper, O.K. p. 62.)。この点で常識の知識論はアリストテレスの知識論 (*Nihil est in intellectu quod non est in sensu.*) に近い。もちろん常識も感覚的知覚が誤つものであることは知っている。しかし、常識はそのような誤ちはたとえば見直したり、繰り返してみたり、他の感覚で検してみたりすることによってみずから正せると考えているのである。あるいはもっと無責任に、常識は科学にそれら誤謬の発見と原因の解明を期待して安んじているのである。しかし、哲学者は古来ここ知覚に極めて入り組んだ、そして、及ぶ所の広い問題を見て来たのである。

われわれは感覚的知覚を二つの面から分析してみようと思う。一つは感覚的知覚とくに視知覚の概念を構成する諸要素の論理的分析であり、一つは感覚的知覚の知覚している対象は何かという存在論上の論定である。この両者は、主観的知識と客観的知識の相違を明らかにするに役立つであろう。

1.2 すでに述べたごとく感覚的知覚の誤つことあるは常識も認めるところである。たとえば幻覚、錯覚などの存在は常識の世界でも認められている。従ってわれわれの知覚概念の分析が掲括すべき諸要素は、正しい知覚 (*successful perception*) のみならず、誤った知覚、すなわち、知覚における誤謬 (*falsidical perception* すなわち *failures in perception*) をも説明しようのようなものでなくてはならぬ。このことが意味するのは、知覚の諸要素のうちには、単なる物理的刺激としての感覚以上のものが含まれていること、である。生理学的過程としての感覚そのものには真または偽ということはない。真偽が問題にならぬところでは、知覚が真を伝えているか否かの成否は問題になりえない。従って、知覚は入力 (外的刺激) のみでは説明されえない。ハンソンが言うように「視知覚には眼球が出くわすよりも多くのことがある」 (*Patterns of Discovery*, p. 7.) のである。眼を開いたとき、確に物理的生理的過程としての視覚感覚 (網膜上の刺激) は生ずるであろう。しかしそれはわれわれの感覚的知覚の生起と同一ではない。

もちろん、すべての感覚が意識されるわけではない。意識されない感覚の過程は主観的、すなわち知覚主体の側から言えば知覚とは言えない。ここで

言う意識は、対象を指定したり特徴づけたり、する以前の意識であって、いわば最低の、基本的な過程、活動、状態つまり、知覚の直接知を与える感覚的感受を意味している。感覚的感受 (sensory awareness) についてはこれ以上、言語的な分析を行なうことは困難であり、恐らく、不可能であろう。感覚的感受はすべての知覚に共通であり、われわれの知覚の対象が意識されわれわれと関わりをもつための基本的要素である。(sensory awareness に訴えないで、知覚の解明を行うとした人に G. Ryle や Armstrong がいる。(cf. D. Locke p. 28-9.)。もちろん、Ryle とても sensory awareness がないというのではない。知覚の分析に対する別のアプローチをとるのである)。それがどんなものであるかを悟るにはわれわれはむしろ、見る、聞く、触る、という実際の経験に訴えて自知するがよいであろう。

しかし、われわれがここで物理的、生理的な過程としての感覚がまだ感覚的知覚と同等でないと言うのは、そのような客観として見られた物理的・生理的過程の生起と、感覚的感受の生起が一對一に対応しないということのみではない。しからば感覚的知覚は生理学的要素ないしそれを主観的意識の側から指示する感覚的感受以上に何を含むのか。

知覚は感覚的要素をふくむばかりでなく、判断またはそれに類した知的、認識的な要素をもふくむとしばしば言われる。そのことの意味を少し明らかにせねばならぬ。

1.3 知覚は知覚の対象を要求する。たとえば、見る (seeing) ことの成立のためには、われわれの見る何物かが (たとえ幻覚であっても) そこに存在するのでなくてはならぬ。しかし、逆は必しも真ではない。何物かが眼前に存在していても、それをわれわれが知覚するとは限らない。知覚するためには、その知覚が正しい知覚であれ、間違った知覚であれ、その知覚に気づき (noticing)、意識し、その中でものを弁別 (discrimination) することが必要である。この気づき、または、弁別の生じないときは、見れども見えずであって、見誤り (failure in seeing) ではなく、見そこない、見損じ (failure to see) がいわば起こっているのである。この気づきないし弁別はすでに感覚 (視覚) の観念の中に含まれているとも考えられる。しかし、ここでいう弁別はまだ弁別内容へ言及するものではない。まだ弁別された対象の特徴づけを含まない。それ故、かかる弁別のはたらきと物理的ないし生理的過程とからのみではまだ知覚 (見る) の成立に十分な議論はできない。

対象の内容を弁別しない気づきの概念を説明するのに次の例が役に立つか

もしれない。私が一本の木を知覚していると、完全な意味で言えるためには、それが一本の木であることを悟り、認知して判断しなくてはならないであろう。しかし、それがそれ（木）であることを私が悟っていないにもかかわらず、私は木を知覚していると言ってよい場合があることは明らかである。（もちろんこれはそれが木であることを知っている第三者の存在、または、それに類したものを必要とする）。たとえば、もし私が霧の中に、本当は木であるところのもののぼんやりした形象を見たとすれば、私はそれが実際に何であるかを知らず、間違っって人間と見做したとしても、私はその木を見ていると言われてよいであろう。この意味では私が木を見ていると言われるのに必要なことは、私はそれを1本の木であると判断しているということではなく、私がそれ（本当は木であるところのもの）に気づくことである。私は木に、それが木であることを気づかずに、気づいていることは可能である、というのがここでの眼目である。対象が何であるかを本当には知らなくても、対象が何であれ、それがそこにあることを認めているかどうかというのが、気づくということのここでの意味である。この最も弱い意味での「気づく」はたらきが知覚における今一つの必要要素である。カーペットの上の汚れを、それがそこにあることさえ悟らないという意味で気づいていないなら、いかなる意味においても私は、そのカーペットの汚れを知覚しているとは、言えないであろう。

感覚的感受と気づきの差異は、いわば、後者は前者を知覚（最も弱い意味での）に変えるものであることにある。生理的、神経的な状態としては、私が外物から或る影響ないし刺激を蒙っているに拘らず（例えば網膜像はうつっているのに）、それに気づいていない場合、その感覚的感受は起こっていない場合がありうるし、感覚的感受はもっているのに、気づきを欠くために、知覚は成立していないこともありうることになる。あるものの知覚には、その感覚のみならず、気づきをも含めねばならないのである。

知覚の第三の要素は、知覚はその対象を何かとして知覚するという、その知覚内容、事態の知覚（*perception-that*）である。この場合、客体を何かとして、すなわち「……と（して）」知覚するというとき、誤った知覚をも含めて考えられている。すなわち、ここで事態知覚というのは、必ずしもはっきりした判断ということではなく、知覚について何らかの意見をもつということであり、この意味でのみ気づき（弁別）と異なるのである。しかし、この内容知覚はいかにして成立するのであろうか。

1.4 われわれが当面のところ問題としている知覚は感覚的知覚、すなわち常識の世界の知識の基礎をなしているものである。それ故、そのような知覚の要素を分析するには、日常的世界において通用している言語、すなわち、日常言語において「知覚」ないし「見る」という言葉が、どのように用いられているかを、いくつかの事例について考察してみるのが一つの道であろう。

日常言語の分析が哲学の仕事であると標榜する一派の祖の一人とされる G・ライルの議論はこの意味からもわれわれの関心を惹く。彼は見るということの成立には、弁別の視覚感覚 (visual sensation) のみならず、それ以上のものが含まれているという。われわれがある物を見る場合、その視覚感覚をもつだけでなく、それを知性のある特定の枠組の中でもっているのである (G. Ryle, *Concept of Mind*, 1949, p. 229.)。人がいわば傾性として獲得し、保持しているところの枠組み、ライルの言葉で「知覚の処方 (perception recipe)」を行使することなしには知覚は成立しない。もっともライルは、本来の見るという知覚と、想像、空想、幻想、錯覚などの総称としての、いわゆる括弧つきの seeing, 値下げ札つきの視知覚 (<見る>) とを区別している。しかし、この札つきの見るも知覚の処方への関係をふくんでいる。すなわち、札つきの見るは心眼へ知覚の処方と呼び出すのである。

知覚の処方なしには、あるものをそれとして認知 (recognize) し得ないのである。例えば、今まで見たことも聞いたこともなかった自動車を突然生れて始めて見たアマゾンの土人は、自動車を自動車として認知し得ない。彼はそれをあるいはハリネズミの怪物と思うかもしれない。このアマゾンの土人はその自動車を弁別はしたが、認知はしえなかったのである (すくなくともわれわれの処方に従っての認知はしなかったのである)。

ここでもう一度別の例を出して事態を際立たせたい。野生の鹿は警戒心が強く、人前になかなか姿をさらさない。そして、自分のまわりの事物によって巧みに姿を隠すのである。しかし、有能なる狩人は新米のハンターが鹿を識別し得ないときにも鹿を発見しうるであろう。すぐれた狩人をガイドに持ったハンターは、どこに鹿があるか目の向けどころを教わり、その地点に特別の注意を払うであろう。しかし、それでも新米のハンターは、巧みにカムフラージュした鹿を見出すことができないであろう。このとき、ハンターの眼は狩人と正に同じ視覚上の刺激を物理的には受けているといつてよい。そして知覚の内容 (心像) がある特徴をもっていることについては狩人と同意

しているであろう。

この場合、ライルの規準では鹿を見ていることになるであろうか。あるいは<見て>いることになるであろうか。両者とも否であろう。しかし、見ることに関するこの種の失敗ないし不成立 (failure) は、先のアマゾン土人の場合の失敗とは区別を要する。何故なら、アマゾン土人は弁別はしているが、自動車を自動車として認知していないのであるが、これに反し、カムフラージュされた鹿は弁別されればすぐハンターによって認知されうるであろうからである。

この議論は一方において、弁別が「見る」(seeing)を「見ていない」(non-seeing)から区別する基本的要素であることを示し、他方、知覚の成立は背後に知識の所有を前提することを示唆する(もちろんここに知識と言うものは命題の形をとっている必要はない)。アマゾン土人は見ていないのではなく、見てはいるが見ることのうちに誤謬を含んでいる(もちろんわれわれの観点から言っただけの誤謬である)のである。ライルの分類ではアマゾン土人は怪物を<見て>いるのである(すなわち、本来の意味では見てはいないのであり、視知覚上の誤謬を犯しているのである)。

もちろん知覚の処方(処方)は永久に固定したものである必要はない。又、自動車を自動車とする知覚の処方をわれわれが持たねばならぬ必然性もないであろう。われわれが自動車を自動車として見るような知覚の処方(処方)を行使しているのは、われわれの生活しているのが今のような文化社会であるからであり、現有の処方が妥当性を保持するのは、われわれの日常的世界の傾性を或る程度安定したものと考えること以外に理由はないであろう。ライルの処方の考えには、われわれ人間、生物、その環境が突然変異しないなら処方(処方)は変わらないか、すくなくとも変り難いものであるということが含まれているように思われる。しかしながら日常的世界を超えたところ、たとえば科学的世界については、すぐ述べるハンソン(cf. N. Russell Hanson, Patterns of Discovery", 1958.)の議論が明らかにしているように、知覚の処方(処方)は変るのである。

このことを論ずる前にまず知覚の処方(処方)の概念には非視覚的な要素も入っていることを明らかにしておきたい。たしかに、たとえば本当は見ていない蛇を見ていないと悟らず、見ていると思ひ込んだり、空想したりしうるのは、蛇がどんな外観を呈するかその姿を知っている人のみである。青いものがどのように見えるか習ったもののみが、いわば心眼で青いものを見うる



(思い浮べうる)。それ故知覚の処方<sup>レ</sup>の獲得には過去の知(視)覚経験を必要とする。しかし、ここに言う知覚の処方<sup>レ</sup>だけでは次のような事態を通常の事例から区別し得ない(ここに言う知覚の処方<sup>レ</sup>とは知覚処方<sup>レ</sup>の相対性の自覚が欠けたものを指す)。すなわち、アマゾン土人が始めて見た自動車を大きなハリネズミの怪物と見た理由は、ハリネズミと自動車<sup>ノ</sup>の間に、彼の知覚処方<sup>レ</sup>に従って類似を見たからであるかもしれない。車を初めて見たアイヌ犬は、車を一種の熊とでも思っている(その犬のもつ知覚の処方<sup>レ</sup>に従って)かもしれない。常識の正常性は、知覚処方<sup>レ</sup>の普遍性、恒常性に基づく。しかし、知覚の処方<sup>レ</sup>が恒常的だという仮定は、人間のもつポパーの言う意味での知的世界を考慮に入れず、しかもわれわれが生物として突然変異をしないという二つの仮定をすくなくとも含むであろう(すなわち、われわれの生物的ならびに知的安定性。ただし、知的安定の過度は人間に進歩のないことを意味する)。そしておそらく、人間の生活空間の共通性に基づくであろう。

見ていない蛇を<見た>り、酔っぱらいが<見る>桃色の象や、マクベスの<見た>短剣は、想像、空想ないし幻覚や錯覚であって、確かにライルの言う<見る>の範疇に属する。しかし、ライルにとって、水中で折れ曲って見える棒は、見えるのか<見える>のか。全く素朴な観察者は曲った棒を見ているのであるとしても、すこし知恵づいた観察者は真直な棒を見るのか<見る>のか。恐らくこの光学上の知識をもつ観察者も真直な棒を見るというのをためらうこともありうるであろう(これはライルならば、<見る>というべきである)。従って、ライルの知覚の処方<sup>レ</sup>の考えは未だ不充分であり、何らかの概念が事態解明のため導入される必要があるであろう。そして、その概念は知覚の処方<sup>レ</sup>の含む非視覚的側面を明らかにするものでなくてはならない。

1.5 知覚(視知覚)における非視覚的要素のはたらきをはっきりさせたのはN・R・ハンソン(Patterns of Discovery, 1958.)の議論である。彼は同一のものを異なったふうに見るケースの分析をした。すなわち、今2人の人が同一の物または出来事を見ているとせよ。このときかれらは同じ視感覚(刺戟)を受けとっているとってよいであろう。しかし、それにも拘らず、ある意味で彼らはそれをそれぞれ別様にみているのである。もちろん、「見る」の意味に限定を加えて、両者は同じものを見ているとしか言わないのだ、とすることもできる。しかし、このとき「見る」の解釈は物理的ないし生理的であり、それ以上ではない。物理的ないし生理的な理論に従えば上の

二人は同じ視感覚ないし感覚所与 (sense datum. 今のところ私はこの語をこのような意味で用いる。これは G. E. Moore や B. Russell の用法とは異なる。感覚所与については後述) をもつと言えよう。しかしハンソンは、「見る」の用法には感覚所与に解釈を含ませる用法もあることを指摘した。すなわち、ハンソンは感覚所与を越えたものは何かという問題に対し、ライルよりも一歩進んで、「見るということは理論を担っての経験である」 (seeing is a "theory-laden" undertaking), (Hanson., 1958, p. 19.) というのである。このとき、われわれの見るところのものは単なる感覚所与ではなく、それに解釈が加わっている。このことは、光学的物理的出来事の時間的に後に生起する段階として、知覚者による解釈の段階があるという意味ではない。時間的継起の観念はこの際全く関係がない。知覚の中には、ある意味での所与と、それに基づく解釈という構成二要素がある、という意味である。

かくして、ハンソンに従えば、われわれが「もの」を見る仕方は、われわれの自覚している以上に、世界についてわれわれがもっている理論と信念 (theories and beliefs) とに依存していることになる。このことを示す事例は、「あひる—うさぎ図形」や「さぎ—やぎ図形」などの多義図形 (ambiguous figures) や、反転図形 (reversible figures) における形相転換 (gestalt switch) である。われわれが見るところのものの体制 (organisation) は変る、とハンソンは言う。この体制という観念は彼がヴィットゲンシュタインから借用したものである。ここで体制とは視覚野の中に見出されている何らかの要素、たとえば、図形を構成している点や線のことではなく、視覚野の中の諸要素をどのようなものをなしているか、その解する仕方を言う (gestalt theory は pattern を実在のもつ性質と考えるところに成立したのかもしれないが、われわれの議論では体制は主観的知識、信念や状況の文脈で変わるものと考え)。すなわち、体制は網膜上の刺激のような生理的次元のことではなく、視覚野の中の線や図形を統括するパターンを与えるものである。同一のものを見るのに異なって見るという事態を生む要素はまさにこの体制ないしパターンである。体制化をする心的な働き (mental act) は、われわれが見るもののおかれている脈略と、われわれが学習して自らのものとしている知識や信念などをふまえているのである。2人の人が、体制化と有する知識ないし信念とを同じうすれば同じものは同じに見えるであろう。ハンソンは言う。「見ることは一つの経験である。網膜上の反応は一つの物理的状态にすぎない……見るのは人々であり、かれらの

眼ではない。カメラや眼球は盲目である」と (Hanson., 1958, p. 15-6.)。

1.6 見るということの本性についてハンソンは結論して、それは理論を担った行為であると言う。彼はさらに、見る種類の種類を区別して 'seeing as' と 'seeing that' とに分ける。この区別は必ずしも明確ではない。『知覚と発見』 (Hanson., 1969.) において彼は 'seeing that' を 'seeing as' の前提となるとしているように思われる。'seeing that' を事態の知覚、'seeing as' を物理的対象の知覚と見るとき、事態の知覚は対象の知覚の前段階に他ならず、その逆でないとはハンソンが考えているとすると、ハンソンの考えが成立するかどうかは簡単にきめられない。われわれの日常的世界の知覚の成立は幼児以来の経験を背後にもつことは認めなくてはならぬとしても、対象の知覚なしに事態の知覚が成立するかどうか一概に論定しえないように思われる。ハンソンの考えは日常的世界について特に疑わしい。ハンソンの考えはむしろ科学の世界によく妥当する。日常的世界における知覚内容も知覚者のもつ知識と相対的であることは認めなくてはならないが、知覚ないし認識の成立に知識の介在することがより鮮明に意識されるのは科学においてである。科学的世界においては、新しく発見されたいかな事態または事実も、その時点において認められている言語——日常的言語であれ、科学的言語であれ——によって記述される。否、されなければならない。そもそも科学というものの成立は、既存の知識の批判を通じてのみ可能であり、科学の成立は、科学が批判すべき知識世界を当然前提するのであり、その世界を記述する言語を当然前提するのである。そしてその言語は当然日常言語ないしそれ以上のものである故、対象を指す何らかの言葉を有しているのである。それ故、仮りに科学がまだ陽子という言語をもたなくても、陽子の示すある事態を記述できるであろう。すなわち、科学の世界は今まさに越えられんとする言語が対象を指示する言葉をすでに有している故に、事態の知覚が対象の知覚 (陽子の知覚と云って悪ければ認識) に先き立つと言えように見えるのである。

これに反し日常的世界は恒常的世界である。この世界を表わす言語は、むしろ対象を指示する言語から発達を開始したとき言いたくなる性質のものであり、この世界の知識源たる感覚知覚の示すところには一般に信を置かれているのである。そこでは対象の知覚が端的に与えられている。あるいは、幼児以来の経験や心理学者の言う学習を背後に有するにしても、それらはい

いわゆる知識というよりも知覚者の傾性 (disposition) または習性 (habitus) となっているのであって、物についての一面からの知覚像から、物の現われをではなく、むしろ物そのものを知覚する。物がそのある一面をこちらに向けているのを見る。日常的世界にはいわば新しきものはない。そこでは既得の知識が知識として意識的に用いられることすら稀である。日常的世界とは物を基本として考えられる世界であるときえ言えよう (このことは日常的世界が真の实在であると言う意味ではない)。

以上の理由で私はハンソンの 'seeing as' と 'seeing that' の区別に関する議論は、知覚の一般的構造を分析するのにそのまま用うることはできないと考える。しかしながらハンソンのこの区別は、「見るということは知識または信念を含む」ということの明確化のために提出されたものであろう。これは彼が G. N. A. Vesey ("Seeing and Seeing As." P.A.S. 1956.) に対する反論にも見られるように思われる。ヴィジーの言うように 'seeing as' を、認識値上のみえ (epistemic appearance) のみに限るとき、知識や信念が見ることに入り込む構造の明確化が果せないと考えたのであろう。しかし、ふたたびハンソンを批判すれば、'seeing that' のみが知識や信念を見ることに導入するのだと考えるのは誤りである。何故なら、あるもの (たとえば本) をそれ (本) として認めること (identification) は見られているものへのラベルを正しく貼ることであり、これはある意味で見るときに知識を用いていることにならざるであらう。すなわち、ライルのいう知覚処方 (prescription) の適用の一例であらう。更にまた、ハンソンの議論が 'seeing as' を 'seeing that' に還元しようと (その間の依存関係は否定しないが) するものであるなら、われわれが適切なる知識を 'seeing that' の段階でもつのに、'seeing as' の段階、すなわち、ラベル貼り換えすれば認定 (identification) の段階で誤つことをハンソンは説明し得なくなるであらう。(車をハリネズミの怪物と見る (see as) アマゾン土人が、'seeing as' としての見る (seeing) にあやまって、われわれと異なるラベル貼りをしたとしても、それが間違いというのは、われわれの観点からのみ言えることである。車が自分を殺しうること (see that ……) はアマゾン土人のみならず、車を熊だと思っているであらうアイヌ犬も知りうるであらう)。

1.7 もちろんハンソンの知覚への興味は、科学哲学との関係において持たれているのであり、その故かハンソンは見ることのうち、いわゆる幼稚なるものには興味を示さない。ここに幼稚というのは視知覚をもつ際に知識を用

うることの無いような見るのことである。細菌学を知らない子供でも顕微鏡をのぞけば黴菌を見るときか、例のアマゾン土人が自動車を見るという意味での‘見る’はハンソンの興味を惹かない。しかし、彼の議論の不備はまさに「幼稚な」知覚の説明において現われるのである。

ハンソンの議論は明快で優れた論点を含むが、同時に不備を含む。しかし、信念や知識は見ることを構成する一要素であるという彼の指摘は重要である。この知見は、われわれが知識を感覚的知覚の世界、すなわち、常識の世界から出発して、科学や芸術へと高め、増大し行く過程の論理的構造を明らかにするに役立つであろう。さし当ってわれわれは感覚的知覚の第3の構成要素として、‘seeing that’ないし‘perception that’（事態知覚）をとり出し、見ること、また一般に知覚には、知識（knowledge）や信念（belief）が介入することを指摘しておこう。これは H. H. Price の言う認知（recognition）の段階と考えてもよい。（H. H. Price は Hanson の ‘seeing as’ と ‘seeing that’ に対応するような ‘recognition of individuals’ と ‘recognition of characteristics’ の二つを分類し、前者は後者に依存するという。彼の場合、後者は更に2分され、‘primary recognition’ と ‘secondary recognition’ すなわち ‘recognition of sign’（すなわち、形、包……などの感覚所与の認知）と ‘recognition by means of sign’ とがあるとされる。認知の段階の知覚で、存在のみならず、対象のカテゴリー、特性、また対象についての知識にまつわる誤り知覚が生ずるのは見てとるに容易である。詳しくは Price, 1953. および J. F. Soltis: Seeing, Knowing and Believing. p. 5. III, chap 7. を見よ。）。

われわれは見ることないし知覚の要素として三つの要素をとり出した。第1に、物理的生理的な要素あるいは主観的に言えば感覚的感受、第2に、弁別（discrimination）ないし気づき（noticing）、第3に認知（recognition）である。

#### 参 考 文 献

Armstrong, D. M., Perception and the Physical World, 1961.

Ayer, A. J., Foundations of Empirical Knowledge, 1940.

The Problems of Knowledge, 1956.

Chisholm, R., Perceiving, 1957.

Hamlyn, D. W., Sensation and Perception, 1961.

- Hanson, N. R., *Patterns of Discovery*, 1958.  
     *Perception and Discovery*, 1969.
- Hirst, R. J., *The Problems of Perception*, 1959.
- Locke, D., *Perception and Our Knowledge of the External World*, 1967.
- Moore, G. E., *Some Main Problems of Philosophy*, 1953.  
     *Philosophical Papers*, 1959.  
     *Philosophical Studies*, 2nd ed. 1960.
- Paul, G. A., "Is There a Problems about Sense Data" in *Logic and Language I*, 1951.
- Price, H. H., *Perception*, 1950.  
     *Thinking and Experience*, 1953.
- Popper, K. R., *The Logic of Scientific Discovery*, 1958.  
     *Objective Knowledge*, 1972.
- Quinton, A. M., "The Problem of Perception" in *Mind*, vol. 64, 1955.
- Ryle, G., *The Concept of Mind*, 1949.
- Soltis, J. F., *Seeing, Knowing and Believing*, 1966.
- Vesey, G. N. A., "Seeing and Seeing As", *P.A.S.*, 1965.
- Warnock, G. (ed.), *Philosophy of Perception*, 1967.
- Wittgenstein, L., *Philosophical Investigations*, 1953.

## 2 知識と主観性

2.1 以上の分析の示すところの一つは知覚は知覚者の信念や知識から独立ではないということである。知覚は知覚者のもっているカテゴリーや概念上の枠組みから独立ではないであろう。ここにいうカテゴリーはカントの純粹悟性概念のごとく硬直したものを意味しない。ある人のもつ概念的枠組みは時代の通説や常識に大きく左右されるであろうが、また同時に、その人の独自性をも許すものである。ある場合にはその枠組みをなす諸概念のうちには流動性をもち確定的でないものもあろう。しかし、これら概念は、もし<完全に>不確定的であるならそもそも概念の役を果し得ない、すなわち、経験的内容を分類し整理し得ないとしても、その<ある程度>のゆるやかさの故に不都合を惹き起こすことはない。むしろその流動性は所与の経験的内容と相互に是正作用を行うことを許すものである。これは人間の知識上の進歩と退歩、深い洞察と皮相な見解の存しうる理由を示すものであろう。

われわれはひっきょう概念構成が知覚ないし知識の成立において果す抜くべからざる重要な役割に直面する。概念構成のはたらきはいわゆる経験のみならず、芸術上の観照においてもいかに本質的かはたとえば E. H. Gombrich などの議論の示すところである。また概念構成の重要性が、より抽象的で高度な事柄、たとえば科学上の認識の場合に、より際立って現われるのは前章の終りで示したとおりである。しかし、認識における概念構成のはたらきについては今すこし詳しく見てみる必要がある。というのは最近科学史の解釈や知識の生長または理論の転換 (theory change) に関して提出された議論は前節で到達した見解のふくむ問題点を明らかにしたからである。以下において科学理論の性格の解明に即しながらこの点について論じたい。

2.2 Wittgenstein の後期の思想は第二次大戦後の欧米の思想界に急速にひろまって極めて大きな影響をおよぼした。この事実の背後にはしかし論理的事実主義 (Logical Positivism) と俗に呼ばれた一連の活動が発展的解消の方向をたどったという事情もあった。これら原子論的な経験論は不可疑の基本的経験命題に知識の確実性を求め、理論的知識の確実性をこれら基本言明との論理的関係によって樹立せんと種々の工夫をこらしていた。しかしながら科学的知識の客観性の樹立のためのこの二つの柱、すなわち、科学の理論の形成における論理と経験的事実の役割りと概念のそれぞれについて難点があらわになって来た。

論理による科学的知識の統制はそれ自身では問題ではない。むしろ科学的理論が無矛盾であることは是非必要なことである。しかし無矛盾性はそれだけでは科学理論の成立にとって充分ではない。無矛盾な科学理論と、筋の通った寓話とは同じではない。科学理論は論理的演繹体系として整備すればよいのではなく、対象 (世界) の機構 (mechanism)、構造をも与え、単に「如何に」でなく、「何故」という問にも答えるものでなくてはならない。このような考えに沿って、たとえば最近では R. Harré は実証主義 (positivism) と規約主義 (conventionalism) に共通な理論としての演繹主義 (deductivism) を攻撃し、實在論的な科学の理解を押し進めようとしているのである (Harré, 1970)。この Harré の考えは他方、原子論的な経験論の基本概念の一つである出来事 (event)、事実 (fact) などの概念への批判にもつながっている。あるいは、同じことであるが、われわれの思考を表明し、伝達する唯一の手段は文であるという説の批判でもあった。Harré が考え

るところでは、出来事はヒュームなどの古典的経験論者や近くは B. Russell が考えていたような原子的で相互に独立なものではないのである。

この原子的で相互に独立な「出来事」の概念や、命題によって表わされる「事実」の概念の批判はもちろん Harré に始まるのではない (cf. A. N. Whitehead)。そして科学的知識の实在論的理解は Harré が演繹主義の一人として批判する Popper のものでもあった。哲学上で人々の関心を惹いた問題の変遷は入り組んだものがある。今はしかしその歴史的考察ではなく、われわれの問題に立ち帰らねばならない。われわれの問題にしているのは論理的経験論の難点のうち基本的言明の設定に関する事、言い換えれば、言明の意味の性質に関する問題である。経験的事実とは何か。

Wittgenstein の思想の前期と後期とを分かち意味論ないしは言語哲学における大きな転回は極めて象徴的に、今われわれのかかっているところと大きなつながりがある。彼の "Philosophical Investigations" の後、多くの科学史家や科学哲学者が実証主義的な科学理解に反対し、科学上の探究は基本的に仮定ないし前提をふまえて行われるのであり、そうした仮定、前提をなす知見や信念から全く独立な経験や観察というものは存しえない、と主張するに到った。もちろん、こういう主張は彼のみが行っていたのではない。K. R. Popper もつとに「事実は理論によって解釈されたものである」と主張していた (eg. Popper, 1959, App. \*X) し、P. Feyerabend も Wittgenstein よりむしろ Popper の線に沿って、経験論のひとつのドグマである意味不変説 (meaning invariance theory) の批判を行っていた (Feyerabend, 1962, 1963, 1965, 1965a)。意味は理論をになっている (theory-ladenness of meaning) というのが彼の主張であった。あるいは P. Duhem の説とのつながりで解すれば Quine の分析と総合の区別についての経験論のドグマ批判も同じ方向にあるものと言ってよいであろう (cf. Quine, 1953, chap. II)。

これらの説は Wittgenstein の説の影響下に出て来たものというつもりは全くない。彼の説はこれらの説の生ずるための原因であったわけではない。しかし、彼の説はこれらの説とある意味で軌を同じうするものであった。そして、言語哲学的アプローチという今世紀の哲学の論議の方法の大きな趨勢にのって、その後多くの影響を科学哲学についてもおよぼしたのである。そういう意味で彼の後期の意味論を科学哲学の論議の傾向の一つの転回点と見ることはあながち不当ではないであろう。



それでは、その転回の要はどのようなところにあったのか。

2.3 科学は進歩するといわれる。しかし科学の進歩とは単に個別的な知識の量が増えることを意味するであろうか。個別的知識の集積は科学の進歩の全貌ではない。煉瓦積みの比喩は科学的知識の生長の様相の全体を把握しえないのみならず、科学的知識そのものの構造を理解するものではありえない。このような比喩がはたらきうると思うのは経験論のひとつのドグマである。常識にすら信念や知識などの非知覚的要素が含まれていたように、科学的知識には理論が含まれ、踏まえられている。理論は事実の集積ないし要約であるというのは今上に述べたのと同じひとつのドグマである。

かくしてたとえば Feyerabend は、知覚は信念に依存するという説は徹底的な経験論者 (radical empiricist) の思うごときでたらめなことではないとして、次のように言う。「どの理論もそれ自身に属する経験をもち、一つの理論の経験は他の理論の経験と重なり合わない」と (Feyerabend, 1965)。S. Toulmin も力学について、どんな理論も基本的ケースすなわち‘パラダイム’ (a standard case or ‘paradigm’) に明からさまに、または、内々に言及しており、このパラダイムが説明される現象は何であるかをまず同宅することから始まって、説明が満足か否かという最後の決定まで支配する、といっている。自然についてのパラダイムの変化は自然の見方に大きな変化をもたらすのである (cf. S. Toulmin, Foresight and Understanding, 1961)。T. Kuhn も同様のことを言い、パラダイムの変化は科学者達の世界の見方を変えるという。つまりパラダイムの革命的变化の後には科学者達は今までと全く違った世界にいることになる。固定的なデータすなわち、経験から中立な観察データがあって科学者達はそれをいろいろに解釈するのが理論設定なのではない。科学者がそういうことをするのは通常のすなわち、革命的でない科学 (normal science) の場合であって、そのときには科学者は科学内のパラダイムを洗練、拡張し、明確にしようと試みる。しかし革命的な時期には科学者は新しいパラダイムをもつのであって、古いパラダイムの中で解釈につとめるのではない。いわばそれは、形相転換 (gestalt-switch) である (cf. T. Kuhn: The Structure of Scientific Revolution, 1962)。さてこのような説の基本点を次の二つに集約しておく。(i) 科学上の語句の意味はそれが生ずる理論内での文脈によって定まる。(ii) ある理論内にある語句は、その理論が変ずる場合には根本的に意味変化をする。この説の帰結の一つは、理論に中立な観察文というものの存在を認めな

いということである。観察文が理論の中に組み込まれる限りそれは理論から独立ではあり得ない。かくしてこれは論理的経験論に基づく科学理解が経験と理論の二元説であったのに対比して言えば一元説の立場と言えよう。この説を以下では意味根本変化説 (radical meaning variance thesis) と呼び、RMVT と略記する。もちろんこの呼び方は敢えて単純化することによって各論者の議論の違いを無視するばかりか、たとえば Popper は意味の議論にはかかわっていないという事実を歪める点において問題がある。しかし、これは差し当たっての議論には支障は来さない。それではこの RMVT に対する問題点とは何か。

2.4 われわれの問題はまず第1に RMVT の健全性である。もし RMVT から矛盾または不条理な帰結が生ずるとすれば、それは RMVT に対する *Reductio ad absurdum* と解さなくてはならない。次に、もし何らかの手だてによってそのような非難をまぬがれ得たとしても RMVT は科学における知識の成長進歩の事実を説明しうるであろうか。もちろんこの説明を狙ったところに RMVT の提唱の動機があったはずである。しかし、RMVT は目標を達成したか。これが第2の問題である。第3にこの立場に立つとき知識の客観性はどうなるかが、すぐ思いつかれる問題である。知覚の議論すでに論じたように同じものを見ても同じ観察をするとは言えないのである。RMVT は知識を主観的なものとするように思われる。

第1の問題について RMVT はその極端な形では健全でないことが示される。何故なら RMVT から、知識の極端な相対主義と無秩序が招来されることになるからである。これは第2、第3の問題とも関係する。第2の問題も第1の問題と関連している。問題の核心は決定的実験 (crucial experiment) の概念を RMVT は的はずれで空しいものとしてしまうことにある。これは決定的実験によって競合諸理論のどれを採るべきかを決定できなくする恐れを生ずるからである。もしそういう帰結が生ずるなら RMVT はもともとの狙いであった科学的知識の進歩という事実の説明に失敗してしまうことになる。事実が理論を担っているという性質が決定的実験を空しい概念にする恐れがある。というのは、科学の基礎言明 (basic statements) の真または偽が理論と独立に決定し得ないかもしれぬからである。

第3の問題は、観察事実が理論と独立に一定の意味をもち真理性を保ち得ないなら、科学的知識についての基本的見解が崩壊してしまうのではないか、というものである。C. I. Lewis のような所与 (the given) の概念

が成立するなら、われわれの思想や理論のテストと評価のための外的な規準が与えられることになる。しかし、われわれの関心、思考のカテゴリーから独立な感覚所与というものが果して可能であろうか。もし事実というものが観察者に相対的であるなら、すなわち、主観性が入るのを免れないなら、如何にして知識の客観性は成立しうるであろうか。

われわれはまず RMVT そのものの健全性について考察する。しかし RMVT の諸々の形態のすべてにわたって論ずることはここではできないので、さしあたり Hanson 説をとりあげて検討する。

2.5 彼は“見る (seeing)’ の意味を区別する。今ケプラーとティコブラーへが丘の上で日の出を見ていると仮定する。この時二人の網膜上の知覚像は同じであるとしても、見ているものは同じではないかもしれぬ。多義図形においてその図形を鳥 (さぎ) として見るか (seeing as) やぎとして見るかという言い方はこのことの可能性をすでに示している。二人の視覚上の経験は同じものであるとしても、ケプラーは太陽は固定しており、地球が動くのだと考え、他方、ティコブラーへはアリストテレスやトレミーに従い地球は固定していて他のすべての天体がそのまわりを回るのだと言う。いずれが正しいかは、16, 7 世紀においては観察次元の論議で決定されることではなかった。それ故、ガリレオはトレミー派の人々に言えた。地球が、〈事実〉、宇宙の中心であるという証明はまだ誰も提出していないと。

「日の出を見るケプラーとティコブラーへは同じものを見ているであろうか」。これは事実についての問ではなく、「見る」の概念の問題かもしれぬ。Hanson はしかし上記の問に対し、肯定の答も否定の答もともに何がしかの理由をもつと考える。網膜への太陽からの刺激は同じという意味では両者は同じものを見ている。すなわち、答は肯定。しかし、太陽を見ることは網膜への刺激を見ることではない。見ることには眼球に出会うもの以上のことが存する。このとき答は否である。

けれどもケプラーとティコブラーへは同じ物理的対象を見ているのでなくてはならぬ。両者同じ対象を見ているのでないなら、両者は同じものを見ているかどうかという問は意味を失うであろう。

ある種の共通の視覚上の経験をもちることが同じものを見る (seeing the same thing) ということでありうるかもしれぬ。この経験は太陽を見る (両者が「太陽」ということで異なるものを見ているときの〈見る〉) ということの最も基本的なものであろう。両者の用うる「太陽」という言葉のみが共通

性の唯一の手懸りならケプラーとティコブラーへは同じものを見ていることはありえない（同じものを見ていても同じものを見ているのではない）。しかし共通の視覚経験に言及することによって対象（外的対象）を同定（identify）しうるであろうか。共通の視覚経験というのは知覚表象であり、これは内私的（private）な、内的挿話ではないか。視覚上の知覚像について語るのは非常に複雑な手続きを要するであろう。私的な経験における知覚像の明快さは決してその像を公的な仕方で他人に伝えることの容易さを意味しない。知覚像の他人への伝達はすくなくとも相当な物理的道具か、言語的な手管を要するであろう。それ故視知覚像に訴えることを止めて他に方策をもとめねばならぬ。しかしここで問題が生ずる。

C. R. Kordig は指摘する（The Justification of Scientific Change, 1974）。Hanson の議論は次のような形をもっている。

(1)  $m_0$  (Tycho) sees  $X_0$  (the sun Tycho sees).

(2)  $m_1$  (Kepler) sees  $X_1$  (the sun Kepler sees).

ところでティコブラーへは太陽を“動くもの”として見るがケプラーは“静止している”ものと見る。この二つの述語をそれぞれ  $P_0$ ,  $P_1$  とすると Hanson の“見る”の定義に従い、

(3)  $m_0$  sees that  $P_0$  ( $X_0$ ).

(4)  $m_1$  sees that  $P_1$  ( $X_1$ ).

が得られる。ここで  $m_0$  と  $m_1$  が  $P_1$  は  $P_0$  でないこと（静止は動いていないを意味すること）に同意すれば、(4)にもとずき、

(5)  $m_1$  sees that  $\sim P_0$  ( $X_1$ ).

の成立を認めてよいであろう。このとき(3)と(5)から、

(6)  $X_0 \neq X_1$

もちろん(3)と(5)から(6)を引き出しうるかどうかには問題がある。妥当性は‘see that’（…と見る）の意味にかかっている。Kordig によれば Hanson は‘see that’を‘know that’の意に用いたり‘believe that’の意に用いたりしているという。

そこでさらに Kordig に従っていずれの場合も Hanson の議論に難点が生ずることを示しておこう。まず‘see that’は‘know that’の意味だとする。(3)は、

(7)  $m_0$  knows that  $P_0$  ( $X_0$ ).

となる。‘know’の意味（認識する、知る）ということから(7)は  $P_0$  ( $X_0$ )

が事実であることを含意する。よって、

(8)  $P_0(X_0)$ .

同様に(5)から、

(9)  $\sim P_0(X_1)$ .

かくして(6)と同じ結果が得られる。

しかし、 $P_0(X_0)$  が成立するとはどういうことか。ティコブラーへの理論の成立（すなわちその真なること）を意味する。しかしティコブラーへの理論をわれわれは一般に偽としている。われわれは  $P_0(X_0)$  を肯定すべきか否定すべきか。肯定すれば地動説を捨てねばならぬ。否定すれば  $P_0(X_0)$  の前提(1)を否定しなくてはならぬ。これはしかし Hanson の立場上否定しえない。かくして Hanson が、事実は理論を担うという説を守ろうとすればティコブラーへの説を偽とは言えないことになる。天動説は偽でもあり、偽でもないことになる。

次に 'see that' を 'believe that' (…と信ずる) と等値と考えてみよう。

(3)と(5)は、

(9)  $m_0$  believes that  $P_0(X_0)$ .

(10)  $m_1$  believes that  $\sim P_0(X_1)$ .

となる。しかし(9)と(10)から  $X_0 \neq X_1$  は出て来ない。信念の内容は知識の内容の場合と異なり、人によって別のものであっても、矛盾するものであっても、信念文同志は矛盾にならない。かくして、'see that' を 'believe that' と解釈するときは Hanson の説は一層の困難を含むものとなる。という理由はこうである。今時点  $t_0$  においてティコブラーへは  $X_0$  を見、 $t_0$  の後の時点  $t_1$  において意見を変えたティコブラーへは  $\sim P_0(X_0)$  と信じたとする。彼が  $t_1$  において  $X_0$  を見ているなら

$m_0$  believes that  $P_0(X_0)$ .

である。しかし見解を変えた彼については、

$m_0$  believes that  $\sim P_0(X_0)$ .

しかし同一人が同時点において  $P_0(X_0)$  と  $\sim P_0(X_0)$  の両者を信ずるのは合理的でない。かくて一般に人は合理的に意見を変えることはできないことになる。ティコブラーへが太陽を見つづけている限り彼は太陽は動かないのだということを学びえないことになる。

2.5 以上の議論は RMVT のいくつかの難点を明らかにする。たとえば、

(i) RMVTは個々の諸経験の本質的特質を合理的に改訂することを不

可能にする。

(ii) パラダイムの革命後の理論と前の理論とは競合する理論であり得ない。

(iii) 理論のテストや反証ができなくなる。

以下、これらの点について若干の解説を行っておく。

(i) について。われわれは理論  $T_1$  を受け入れているとせよ。われわれの経験するところのこと  $E_1$  は、もしわれわれが  $T_1$  との差の些末でない別の理論を受け入れたならば経験するであろうところのものと異なるであろう。これは Hanson のケプラーとティコブラーへの対比の議論の 'see that' を 'believe that' と解したときの帰結から見てとれるであろう。合理的な人は何人も  $P_0(X_0)$  と  $\sim P_0(X_0)$  とを同時に信じ得ない。Hanson らの意見に従えば、経験内容についてわれわれの信ずるところが変わったまさにその瞬間、経験そのものが変わるのである。このことは、理論や信念の改訂をするとき、われわれが引きつづいて経験しうるはずのことについての基本的な信念や理論の改訂をするのではありえないことになる。それらの信念や理論はわれわれの経験しえたはずのものではなくなっているからである。したがって科学者が経験についての信念を本質的な点で改訂した場合、改訂された意見は、改訂の時点がいつであれ、その時点で彼が経験しえたところのものについてのものではない。かくしてわれわれは信念や理論を改訂するとは合理的に言えなくなる。これは不条理である。

(ii) について。競合理論、または取り替え理論の存在が不可能ないしきわめて困難になる。というのは理論  $T_1$  による経験  $E_1$  に対し、理論  $T_2$  をもつ人は同じ経験を持ち得ず、従って、同じことについて語れなくなるのではないかと考えられるからである。 $E_1$  についての信念と、 $T_2$  による経験  $E_2$  は、お互いに競合し相反する信念ではなくなり、従って  $T_1$  と  $T_2$  も競合し相反する理論ではなくなるであろう。 $T_1$  による世界と  $T_2$  による世界は根本的に変化してしまっているのであるから、社会学の理論と量子力学の理論の間に論理的関係が成立しないというのと同じ意味で、 $T_1$  と  $T_2$  はお互いに不一致な理論とは言えなくなる。両者は別のものを見ていることになる。

(iii) について。理論のテストまたは反証が不可能になるという議論は次のようにすすめられよう。

( $\alpha$ ) 今理論を  $T$  とし、観察言明を  $O$  とする。観察は概念 (体系) または

理論を負っているとする、 $T$ ならば $O$ である。すなわち、

$$T \rightarrow O$$

これを形式論理における条件文（含意）として解釈すれば、 $T$ が真のとき $O$ は真であり、 $T$ が偽なら $O$ は真または偽のいずれであってもよい。しかし $O$ が理論を担っているということは次のように解釈されるべきではないであろうか。すなわち、 $O$ が真なら $T$ は真、 $O$ が偽のときも $T$ は真（というのは $T$ が偽なら $O$ は偽ですらあり得ないし、まして真ではないから）であろう。従って $O$ が真で $T$ が偽というケースは成立しない。また $O$ が偽である故に $T$ が偽というケースも成立しない。このことは理論を観察によって却けることができない（反証しえない）ことを意味する。

( $\beta$ ) 理論 $T$ に対して新しい理論 $T_1$ を考えてみる。そして今 $T_1$ は $T$ と矛盾関係にあるとする。 $T$ を否定すると $O$ は真でも偽でもない（的はずれの）言明となる。従って $O$ は $T_1$ の基本言明とはなり得ない。ところで今 $T$ を古典物理学、 $T_1$ を相対性理論、 $O$ をマイケルソン—モーリーの実験を述べる言明とする。歴史から周知のごとく $O$ を真とした故に $T$ が偽とされ $T_1$ が真とされたのである。このことはRMVTが科学理論の進歩を説明できないことを示すのではないか。

2.7 以上の議論はRMVTの不備を示すものであった。われわれは以上の議論から、経験（それがどんな種類の経験であるかという限定は別の問題であるとしても）は科学理論にたいして中立であるという論理的経験論（Logical Empiricism）の主張にもどるべきであろうか。あるいはすくなくともRMVTを修正ないし捨てるべきであろうか。

歴史的事実立ちかえって言えばRMVTは論理的経験論の立場に満足しえないところより生じたものである。論理的経験論の科学理論の理論は科学の実際を見ていない。すなわち論理的経験論は、科学理論を見るに形式的体系に解釈規則を精密に適用して意味論的解釈を与えられているものとする。これは高々すでにでき上った科学理論のみを対象としているにすぎない。このような科学理論観を正さんとするのがRMVTの狙いであった。

RMVTは従って科学理論についてお互の批判を許す自由主義—理論多元論（theory pluralism）—を一方では守ろうとし、他方では、論理的経験論の観察言語の意味不変説（meaning invariance thesis）に反対するものであった。RMVTは一つの科学的革命があった後は科学者は科学上の言語を新しい仕方を用いるという事実に基づいたものであり、われわれの知識は信念や理論

(あるいは概念的枠組み)を組み入れたものとして成立しているという正しい分析をふまえたものである。しかるに上述の理論の帰結がもし正しければ、RMVTは論理的経験論のもっていた程の批判の自由をも失ってしまうことになるのである。というのは論理的経験論は観察言語は理論から独立で中立的な意味をもつと考えていたので、観察命題に訴えて理論の批判、説明力の大小の比較がそこではいささかながらも保証できたのであった。しかしRMVTは観察命題の意味の独立性中立性を否定した。これは各理論はすべてが意味を共有する語句を持ち得ず、したがって異なる理論はお互に通訳不可能(incommensurable)であるという帰結をもたらした。

論理的経験論の考えるところでは、観察語句は安定した意味をもち、理論語句は観察語句に関連づけられることによって意味を持ちうる、のであった。観察語句に関係づけられることによって理論語句の意味論的解釈が確定されうるのであり、これに基づいて諸理論の比較は可能になると考えられたのである。RMVTを提唱した人々はこれは科学の歴史の示すところと一致しないと考えた。彼らは論理的経験論の欠陥を意味不変説に依存しすぎるところに見たのである。

以上のような状況を踏えてRMVTのふくむ真理を生かし、不要な主張を切り捨てるにはどのような方策が可能であろうか。

ここでRMVTの主張をすでに行ったように二つに分けてみる。すなわち(i)科学上の語句の意味はそれが生ずる理論文脈に依存する。(ii)ある理論に出てくる語句の意味はその理論が変容した場合には根本的な変化をす。さて(i)については知覚の分析で示したこと、すなわち、知覚は背景となる信念と知識とに応じて変りうるという主張と軌を一にするものであって、ここには真理が含まれていると考えられる。われわれの言語は、一つ一つの語句の意味が与えられて次にその語句の使用規則をその語句の意味と独立に設定するという構造によっては、理解し尽せないものをもっている。知覚も言語(科学理論)もそれぞれ認識者の知識体系、言語の全体において理解される。しかしもちろんこれは語句の指示的意味が構文論的規則(文脈)によって完全に支配されるということではないであろう。また、無矛盾な構文論的規則をもつ言語体系(理論体系)はどれでも科学的理論体系となりうるというものではないであろう。言語の構文論的規則は指示対象の方からの規制を全く受けないかどうか問題である。(i)は多分この点で修正ないし正確化を必要とするかもしれぬ。



(ii) は (i) から独立であるかもしれぬ。というのは (i) のところで指摘した、指示対象との関連で言語が受ける規制があるとすれば、根本的変化という場合の「根本的変化」がある程度制限を受けているものであるかもしれぬからである。意味不変説の批判は意味変化説であっても〈根本的〉意味変化説でないかもしれぬ。反対は極端である必要はない（極端な反対を行うことは覚醒の意味はあるとしても）。すくなくとも法則の次元での理論は形而上学的な次元での理論と異なり、指示対象との関連を強くより大きなものとして持っているであろう。したがって (ii) の主張もより正確に分析する必要があるように思われる。

以上のような考察をふまえて RMVT を補正するのにいろいろな方策がありうるであろう。すぐ考えつく方策の一つは指示対象からの規制をプラトンの世界の不変性に求めることである。プラトンのイデアの世界は神話であるとしても何か知的な世界が共通の地盤として指定できるかもしれぬ。もう一つの方策は観察の実際的成立をもとに、いわばナイーヴに対象自体に不変性をたとえ暫定的仮説的なものとしてでも与えることが考えられる。すなわち観察者のまわりの事物は不変と考えてこれを語句の意味不変性の代りとする方策である。

ところでこのうちプラトンの世界に向うのは科学をドグマ化へ誘う危険がある。あるいは人間は普遍的な知的世界をもちうるのは何故かということをもまず解明する必要を生むであろう。そして後者の途、すなわち、対象自身を不変者と見るときはその対象そのものにいかにして言及し、それを指示しうるかの意味論的議論を必要とするであろう。<sup>(1)</sup> 以下第三章では理論の相互比較可能性と知識の客観性が如何にすれば得られるかについて論じてみたい。すなわち、知覚や観察は背景の信念や知識、したがってそのふくむところの概念上の枠組み如何によって変り、語句の意味は言語上の文脈によって変るといふ主張を守りながら、知識の客観性の可能は如何にして保存しうるか。また、理論の比較すなわち理論を合理的に改訂するといふことは如何にして可能かを明らかにするに努めたい。 (1974年8月。福原山荘にて)

#### 参 考 文 献

- 第2章において新たに加わったもののみを記す。以下同様。  
Feyerabend, P. K., "Explanation, Reduction and Empiricism", in *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, III, 1962.

"How to be a Good Empiricist", in *The Delaware Seminar in the Philosophy of Science*, vol. 2, 1963.

"Problems of Empiricism" in *Beyond the Edge of Certainty*, 1965.

"Meaning of Scientific Terms" *J. of Philosophy*, vol. 62, 1965a.

"Reply to Criticism" in *Boston Studies in the Philosophy of Science*, vol. 2, 1965b.

"Consolations for the Specialist", in *Criticism and the Growth of Knowledge*, 1970.

Against Method, 1975. (revised ed. of the article of the same title in *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, vol. IV, 1970)

Gombrich, E. H., *Art and Illusion*, 1956.

Goodman, N., *The Structure of Appearance*, 1938.

Harre, R. *The Principles of Scientific Thinking*, 1970.

Kordig, C. R., *The Justification of Scientific Change*, 1973.

Kuhn, T., *The Structure of Scientific Revolutions*, 1962.

Lewis, C. I., *Mind and the World Order*, 1956.

Margenau, H., *Open Vistas*, 1961.

Nagel, E., *The Structure of Science*, 1961.

Quine, W. O. van, *From a Logical Point of View*, 1953.

*Word and Object*, 1956.

Reichenbach, H., *Experience and Prediction*, 1938.

Russell, B., *Human Knowledge*, 1948.

Scheffler, I., *Science and Subjectivity*, 1966.

## 註

- (1) この点については K. R. Popper の“第3の世界”の論議を含めて、後章で再び採り上げる。

(未完)